

エコツーリズムの 概念と課題

カロリン・フンク

浅野敏久

エコツーリズムと持続可能性

エコツーリズムの概念をめぐる議論は1980年代末頃から現れた「持続可能な観光(sustainable tourism)」の概念論と深い関係がある。いずれについても観光の現場から国際機関、さらには各種学界にいたるまで広く取り上げられ論じられている。

エコツーリズムの定義についておもなものをHoldenやFennell⁽²⁾がまとめている。なかでも最もよく引用されている定義は、1991年に国際エコツーリズム協会により示されたものである⁽³⁾。

Ecotourism is responsible travel to natural areas

that conserves the environment and sustains the well being of local people.

エコツーリズムとは、自然地域を対象(目的地)とした、環境保全と地域住民の利益の維持とを両立させる責任を負う観光のことなのである。

この定義には、①観光の目的地と②環境や住民への影響という2つの面からエコツーリズムの特徴が示されている。ただし、これだけだと人びとがどのような活動を行うのかという③観光活動の特徴についてふれていないことになり、定義として不十分な面もある。

「持続可能な観光」の説明と比較すると、①については「持続可能な観光」が目的地を問わず、都市などでも成立可能なのに対し、エコツーリズムは自然地域を目的地とすることが明記される。つまり、エコツーリズムは人工的につくられた観光施設などではなく、自然資源をもとに成り立つことが前提になる。②については両概念は基本的に一致する。ただし、定義を解釈する幅は広く、「持続可能な観光」を環境や地域社会の持続可能性ではなく観光産業の持続的な発展に重点をおいてとらえる見方や、エコツーリズムにおける目的地の特徴、すなわち自然地域への観光という側面だけを強調する見方もある。これらはいずれも

なく旅行者などの観光業界に根強い考え方で、それへの批判が国際エコトリズム年をめぐる議論の引き金になった。③については、エコトリズムとは何なのか最も意見が別れているところであり、国際エコトリズム協会のようであらゆる活動を認める立場から、自然について積極的に学ぶ姿勢をもつことを前提とするラディカルな発想まである。ここでは活動の実態よりも旅行者の態度や旅行の形態が問われることになる。

エコトリズムにおける観光活動の特徴とその持続可能性について、国際エコトリズム年の共催者である世界観光機構(WTO)と国連環境計画(UNEP)がまとめたエコトリズムの特徴からみてみよう。⁽⁴⁾

- ① 自然と伝統文化の観察や鑑賞を主たる参加動機とした自然資源をもとに行われる観光
- ② 教育的・解説的な面を有する観光
- ③ 主に少数数のグループを相手に、専門的な知識・技能を有する地元資本の中小業者により行われる観光
- ④ 自然や社会・文化環境への影響を最低限に押さえる観光
- ⑤ 地域コミュニティや自然保護にかかわる団体などに経済的な利益をもたらすとともに、当該地域に雇用を創出し、

観光客や地域住民の自然・文化資源に対する意識を高めることにより自然地域の保護に資する観光

この概念には、環境や社会への悪影響を最低限に押さえることだけでなく、自然保護や地域コミュニティへの利益にまで配慮し、エコトリズムは持続可能性を有すべきことが明記されている。「持続可能な観光」はすべての観光行動にかかわる基本的な理念と考えるべきであり、エコトリズムは観光の一形態と位置づけられる以上、持続可能性の理念に背くものは真のエコトリズムとはいえないのである。

一人歩きするエコトリズム

ところで、なぜエコトリズムの定義を問うのか。堅苦しいことなんてどうでもよいではないかという声が聞こえそうである。2001年秋に地理科学学会の主催で、筆者らがオーガナイザーとなる『エコトリズムを考える―自然保護と地域経済の両立をめぐる諸問題』というシンポジウムが開催された(「地理科学」57巻3号で特集の予定)。白神山地や小笠原など日本国内の具体的な現場の話を交えて、エコトリズムの持続可能性などについて議論をしようという狙いがあった。各報告は興味深いものであったが、

パネルディスカッションを進める段になると、エコツーリズムに対するイメージがフロアも含めて実にさまざまで、企画者が前提にしていたことが必ずしも広く共有されていないことがわかった。今となつては反省点が多いが、議論を深めるというよりは質問への説明に終始するパネルディスカッションになってしまった。まさにエコツーリズムという言葉が一人歩きしていることの現れであろう。シンポジウムとしては、そのことを確認し、問題提起をするという最低限の課題をクリアすることはできたが、エコツーリズムの理念をめぐる混乱状況に対して何かすべきではないかという思いをもつにいたつたのである。

そもそもエコツーリズムは途上国の自然保護と開発のあり方をめぐる議論を出発点にしており、先進国におけるエコツーリズムを考えようとすると、根本的な部分は同じでも、エコツーリズムへの社会的な背景やニーズが異なるので、エコツーリズムを国際機関が提唱する文言通りに持ち込もうとすると不都合が生じることがある。例えば、日本でグローバルな観点からも評価される自然地域がどれほどあるといえるだろうか。そして、おそらく国内ではそのような場所よりずっと多くの地域でエコツーリズムの試みがなされているに違いないのである。さらにエコツーリズム

への期待やそれに取り組むうえで課題も海外の諸地域と同じということはあり得ない。当然、エコツーリズムの形態は多様になる。

シンポジウムの事例紹介のなかに、リサイクル体験をメニューとする修学旅行をエコツーリズムととらえようとするものもあつた。⁽⁵⁾これなどはいくつもの点で前述のエコツーリズムの定義に挑戦するものといえよう。一方、この地域には、長年、少人数のグループを対象に自然観察会などのイベントを企画してきたグループもあり、その代表は、エコツーリズムは商業主義のにおいが染みついているので使わないと言いつつ切っている。⁽⁶⁾ひとつの地域のなかにおいてもエコツーリズムをめぐる考え方の対立が生じているのである。誤解のないように書き添えておくと、筆者はリサイクル体験の修学旅行が悪いとは考えてない。むしろ積極的に取り組んだらよいと思う。ただ警鐘を鳴らしたいのは、エコツーリズムをエコロジカルな発想さえあれば、あるいは自然体験しさえすれば何でもよいことになってしまうと、もともとなぜエコツーリズムなる言葉がつくられたのか、なぜその言葉をもとに新しい価値観と行動原理をつくらうとしたのかという、その根本のところがないがしろにされてしまふのではないかということなのである。

余談ではあるが、ともに頭に「エコ」がつくエコミュージアムの話である。昨年5月に日本エコミュージアム研究会により「エコミュージアム憲章2001」が提唱された。エコミュージアム研究会が発足して6年目のことである。エコリズムと比べれば知名度は低い、それでも各地でエコミュージアムの地域づくりが試みられている。当初はエコミュージアムは多様なスタイルがあるのが現実だし、そうあってしかるべきであるといった議論がなされていたが、国内各地でこの語を冠する活動が増えるに連れ、言葉が一人歩きし、そもその問題意識や理念が失われてしまうことに危機感を感じるようになったことが憲章制定の理由とされる。このように本来の思想を離れて言葉や形式だけが一人歩きすることはエコミュージアムやエコリズムだけでなく、いくつも例をあげることができよう。

エコリズムについても、定義や最低限の条件などを軽視しすぎると、エコリズムはただの耳障りのよいキヤッチフレーズにすぎなくなり、本来エコリズムに期待された哲学が尊重されなければなりなく、エコリズムとして成功しているのかいないのか、問題があるのかなのかなど、実際に起きていることや行われていることを評価することが不可能になるおそれがある。エコリズムに着目した出発点や目的、前提が違うと言ってしまうばそれまでだからである。当然、ある一定の方向にそった課題を示すことはできず、単なる言葉遊び、看板の掛け替えだけに終わってしまうことも懸念される。

地理学からみたエコリズム

さて、最後に話を戻して、エコリズムを評価する地

理学的アプローチについて述べる。ただしここでは紙幅の都合があるので、地理学の立場からエコツーリズムを評価する際に重視されているひとつの視点について話題提供をして本稿を閉じたい。なお、日本では評価の物差しそのものが軽視される傾向があるが、それは別として、本稿前段で示した一般論としてのエコツーリズム概念論を前提に話を進める。

それは観光客の出発地と目的地の関係である。観光は中心地域から周辺への移動であるという認識は観光地理学のパラダイムのひとつである⁸⁾。国際観光市場をみるかぎり、多くの観光客が訪れているのは都市なので、この認識は必ずしも正しいとはいえないが、エコツーリズムの場合にはその傾向は確かに認められる。中心から周辺へとは、国際的にみれば先進国から発展途上国への移動であり、国内市場でみれば都市圏から周縁地域への移動としてとらえることができる。そしてこれは単に人の移動というだけの問題ではなく、中心地域による周辺地域からの搾取、中心地域から周辺地域への価値観などの押しつけという面をもっていないかという発想を生む。

国際観光を新しい植民地主義に例える発想は決して最新のものではない。その背景には、大手ホテルチェーンなど、

国際観光産業の進出により、観光客から得られた収入が現地に残らず、観光客の出発地である「中心地」に流れてしまうという事実がある。このような「漏れ」は全収入のおよそ半分にのぼるとされている⁹⁾。

エコツーリズムはこのような状況を現地住民や地場企業の参加を重視することで改善しようとするのだが、それにもかかわらず、新しい植民地主義的な面をもっていると思われる。例えば、エコツーリズムの対象になる自然保護地域をどのように指定するのかにかかわる議論において、基準や規制を決める際にスタンダードとしている「環境」のコンセプトこそ、先進国が周縁地域に押しつけている論理ではないかと指摘されるのである¹⁰⁾。このように保護された周縁の自然地域は中心地域の観光客に利用され、また、そこで豊富に守られている動物・植物相はバイオテクノロジーの資源として化学会社・製薬会社の注目を集める。自然保護地域としての指定は土地利用上の制約を伴い、既存の農業などの経済活動に影響するため、地元で歓迎されない例も多くみられる。エコツーリズムのおもな対象になる保護地域の指定は土地利用に関連する以上、権力関係と切り離せないことにも留意すべきである。保護地域の指定やエコツーリズムの実践がより多くの住民に役立つように、目的

地内の利害関係、権力関係を把握し、調整する必要がある。エコツーリズムの概念をめぐる議論をしつかりとふまえたうえで、それぞれの地域にあった保護方法、利用方法を見つけたすことこそ、地理学の仕事であろう。

なお、エコツーリズムの概念については、⁽⁸⁾日本自然保護協会やエコツーリズム推進協議会などが参考になる。

[注]

- (1) Holden, Andrew (2000) *Environment and Tourism*. Routledge, London/New York, p.193
- (2) Fennell, D. A. (1999) *Ecotourism: an Introduction*. Routledge, London/New York, p. 30
- (3) The International Ecotourism Society (2001) Statement on the United Nations International Year of Ecotourism. http://www.ecotourism.org/statement_on_un.html, 23. 8. 2001
- (4) WTO and UNEP (2001) Concept Paper: International Year of Ecotourism. <http://www.world-tourism.org/sustainable/IYE/WTO-UNEP-Concept-Paper.htm>, 5. 10. 2001
- (5) 篠野敏久 (2000) 高層観光におけるエコツーリズムの試み 地理学季刊第18回シンポジウム資料 4頁
- (6) 前掲 (5)
- (7) 日本エコロジー・シニアム研究会 (2002) 日本エコロジー・シニアム憲章 <http://www.landscaperisumei.ac.jp/jeoms/kenshou.htm>
- (8) Christaller, W. (1955) *Beiträge zu einer Geographie des Fremdenverkehrs*. In Hofmeister, B. and Steinecke, A. Burckhard (eds.) (1984) *Geographie des Freizeit- und Fremdenverkehrs*. Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, S.156-169.
- (9) 前掲 (2) p.194

- (10) Mowforth, M., Munt, I. (1998) *Tourism and Sustainability*. Routledge, London/New York, p. 50
- (11) ⁽⁸⁾日本自然保護協会 (1994) 『NACS-J エコツーリズム・ガイドライン』⁽⁸⁾日本自然保護協会
- (12) エコツーリズム推進協議会 (1999) 『エコツーリズムの世紀へ』 エコツーリズム推進協議会

Funk, Carolin・広島大学総合科学部助教 1961年ドイツのフライブルク市生まれ。フライブルク大学大学院地学研究科人文地理学専攻修了。15年前に日本にきたが、愛媛、神戸、京都、広島と転居してきた。研究テーマは観光とレジャーの地理学で、最近のフィールドは本四架橋がすべて完成した瀬戸内海である。

あそこのしひさ・広島大学総合科学部助教 1963年東京都生まれ。東京大学大学院理学研究科地理学専攻博士課程退学。専門は社会地理学。環境にかかわる市民運動に関心をもちている。仲間と『広島エコロジー・シニアム研究会』なるグループを作って実践活動中。